ースタッフ紹介ー

役　職	スタッフ名
周産期ｾﾝﾀｰ新生児医療ｾﾝﾀｰ長 兼小児科部長	住田　裕
新生児科部長	和田　芳郎
医　長	山本　昌周
医　長	三原　聖子
医　員	山本　真也
医　員	木村　幸嗣
非常勤医員	寺村　崇哉
非常勤医員	磯浦　喜晴

ー概要ー

周産期センターの概要で述べた通り、今年度の陣容は、常勤医5名、2年目後期研修医3名、計8名である。

外来診療は、2013年度から1名の小児科医が外来専従で応援に入ってくれたこともあって、午前の一般診療は月曜～金曜まで2診制を確保し、火曜以外は3診制である。その他、慢性外来、1ヶ月健診、生後2週健診、専門外来として循環器外来（第2金曜、完全予約制）を行っている。予防接種は、これまでのルーチン業務として、RSウイルス流行期間中（当センターでは10月から翌年3月まで）第1、3金曜日にシナジスを該当児に接種している。また、他院での接種困難児を対象にインフルエンザワクチン接種も継続している。

泉州二次医療圏における小児救急医療体制に関しては、2006年11月3日にオープンした泉州北部小児初期救急広域センター(日曜、祝日、年末年始、の9:00～22:00、土曜の17:00～22:00)がその機能を維持している。入院が必要と思われる患児は、その診療時間帯に後送病院として、輪番制で行っている従来の泉州地区7病院（和泉市立病院、泉大津市立病院、市立岸和田市民病院、岸和田徳洲会病院、市立貝塚病院、りんくう総合医療センター、阪南市民病院）に紹介され、そこで最終的に入院の要否が決定される。また、消防隊からの救急車による搬送も当番の輪番病院に集められる。広域センターの終了後、23時以降は、その日の輪番病院で従来の夜間小児救急が行われている。当院の小児救急輪番担当日は、毎月偶数週の日曜日17:00～23:00が広域センターからの後送病院担当、同23:00～翌6:00が一次救急診療対応時間帯である。

当センターにおける小児科医の確保は、昨年度一時的に増加し、今年度も幸い維持しているが、いまだ大きな問題として残っている。泉州南部の小児科医も高齢化によってその数の減少が年々続いている。公的な乳幼児健診や夜間休日小児救急に参画できる小児科医の減少につながり、危機的状況に変わりはない。

市町村の乳幼児健診に対して、当院小児科から、泉佐野市、泉南市の4ヶ月児健診にそれぞれ月1回、熊取町の4ヶ月児健診に年6回、田尻町の5ヶ月児健診に年6回、泉南市の1歳半健診に月1回、二次健診に年6回、担当医として出務している。

医師不足解消の方策の一つとして始まった、集約化による合同二次健診（すこやか健診）が2016年4月から開始となった。泉佐野市、泉南市、熊取町、田尻町の2市2町の二次健診を月1回、りんくう総合医療センターに隣接する教育研修棟（サザンウィズ）2階に健診会場を設営し、医師3名（りんくう総合医療センター小児科2名、医師会1名）、保健師、助産師、看護師、栄養士、事務の参加を得て、毎月第2木曜に行っている。現状、1回30人弱の受診にとどまっているが、大半が泉佐野市の住民である。泉南市の住民には、車を持たない家族も他市町より多いため、泉南市での二次健診も隔月ではあるが残している。

医師不足は、予防接種を実施する医療機関の減少にも及んでおり、当センター出生児を対象に定期接種、任意接種を行っている。委託契約は貝塚市、泉佐野市、泉南市、熊取町、田尻町である。当初から、BCG、子宮頚癌ワクチンは対象外としているが、2016年度からロタウイルスワクチンの任意接種を追加したが、予想外に多くの希望者がいることがわかった。場所・人員の制限のため、2歳以上の定期接種を行えていないのが現実である。

次に、夜間休日小児救急（泉州南部初期急病センター）であるが、こちらも泉佐野泉南医師会から参加できる小児科医の減少により、泉州南部初期急病センター（一人で小児科を担当）を維持することが困難となり、かなりの比率で近大医学部小児科、大阪母子医療センター（旧大阪府立母子保健総合医療センター）、阪南市民病院、りんくう総合医療センターが担当している。当センターは偶数月第3日曜10～17時、第2・3土曜日18～21時を担当しており、出務回数は年30回に及んでいる。

以上の状況は、ここしばらく持続することが予想され、当センターの小児科医は病院内にとどまらず、広く地域医療に携わることとなった。しかし、当センターの小児科医数を維持することも困難な状況にあっては、将来的に不測の事態が起こらないとも限らない。泉州二次医療圏南部における全体的な小児科医不足は、今後も大きな課題となっており、何らかの手立てが至急に必要である状況に変わりはない。

ー実績ー

2016年度一年間に外来を受診した患者（生後2週健診、1ヶ月健診、予防接種を含む）の延べ数（輪番救急外来受診患者を除く）は11,422人、月平均約952人、2015年度の受診児数が10,247人、月平均約854人であったので、年間1,175人、約1割の増加であった。泉州医療圏の夜間休日小児救急輪番の受診児数は483人と若干の減少はあったが、例年と横ばいレベルであった（表1）。入院児数は39人（8.1％）、昨年度7.5％、に比べると若干の増加が認められたが、受診児の重症度は相対

的に低く、この傾向に大きな変化はなかった。

小児科一般病棟の入院患者数は延べ290人、昨年度に比して21人の増加を見た。輪番救急外来からの入院児が占める割合は13.4％であった。表2に入院児の主診断を示す。例年通り、肺炎、気管支喘息、喘息様気管支炎、RSウイルス感染症、ウイルス性腸炎、川崎病など急性感染症が大部分を占めていたが、周産期センター開設以来、新生児黄疸の光線療法治療入院の割合が高く、この傾向は今年度も同様であった。病診連携によって紹介された患者の入院数は129人（44.5％）とほぼ横ばいであった。

表1　夜間休日小児救急輪番受診児数

	2次救急（9時～17時）*	2次救急（17時～23時）	1次救急（23時以降）	計
受診者数	23	79	383	483
救急搬送	11	55	31	97
紹介者数	11	24	4	39
入院児数	7（30.4％）	24（30.4％）	8（2.1％）	39（8.1％）

＊4/4、6/12、8/14、10/9、2/19 の5日間を担当

―今年度の成果と反省点・来年度への抱負―

今年度に常勤として小児科に入った医師は、かつて市立泉佐野病院時代に当センター小児科で2年間の後期研修を終えた医師であり、これまでに多くの後期研修医（小児科専門医制度開始後は専攻医という名称で統一される）を育ててきたが、当センターに戻ってきてくれた初めてのケースである。今度は、後輩を育てていく立場となったわけだが、当センターの果たすべき役割の一つが、若い小児科医を育てること、これを再認識した次第である。

また、昨年度から始まった、2市2町合同による乳幼児健診の二次健診（すこやか健診）は、想定の受診児数よりも少なめで推移しているものの、とりあえずは順調にその機能を果たしてきている。将来的に小児科専門医を目指す、りんくう総合医療センター小児科の若い医師たちの研修の場ともなっているし、なにより、泉州南部における慢性的な小児科医不足に対して、集約化によって健診医確保のために奔走することから解放されたことが非常に大きい。

周産期センター新生児医療センターのところに記載したように、特に後期研修医の確保は、周産期を含めて小児科の重要な課題である。日本国内で専門医制度に関して若干議論がかみ合っていない診療科もあるようだが、日本小児科学会は当初の予定通り、2017年度から実施することが正式に決まった。当センター小児科は専門医制度上の基幹病院である大阪大学小児科の関連病院となる予定であるが、この制度では、基本的に大学病院に専攻医が集まり、そこから研修先を決めていくことになるので、基幹病院にどれくらいの専攻医が集まるかが明暗を分けることになる。その意味で、実際ふたを開けてみないとわからないのが実情である。

当センターで現在勤務する専攻医3名については、2名が大阪大学小児科で、他の1名は大阪市立大学小児科で研修することが決定した。これまでの慣習では、専攻医3年目は1年間高次病院での研修となっているのだが、3人が同時に退職となるとりんくう総合医療センター、ひいては泉州二次医療圏の周産期医療・小児医療・小児保健に大きな支障をきたすこととなる。そこで、それぞれの大学と交渉の末、1名ずつが6ヶ月ごとに交代で高次病院での研修を行うことで了解を得、かつ、大阪大学で研修する2名については、退職という形をとらず、りんくう総合医療センターに籍をおき、長期出張とし、研修終了後はりんくう総合医療センターに就職するという運びとなった。2016年度10月から1名が大阪大学小児科で6ヶ月間研修を行い、2017年度4月から交代で大阪大学で研修予定である。

表2　入院児主診断名

感染症・寄生虫症	
アデノウイルス感染症	2
ウイルス感染症	1
ヘルパンギーナ	2
マイコプラズマ感染症	3
ムンプス	1
ムンプス髄膜炎	1
ロタウイルス性胃腸炎	4
ロタウイルス性腸炎	8
胃腸炎	1
感染性胃腸炎	5
感染性腸炎	1
感冒性胃腸炎	1
急性胃腸炎	3
急性腸炎	1
細菌感染症	1
細菌性胃腸炎	1
細菌性腸炎	2
突発性発疹症	2
敗血症	1
百日咳	1
溶連菌感染症	2

筋骨格・結合組織疾患	
頚部痛	1
川崎病	11
不全型川崎病	1

呼吸器系疾患	
RSウイルス気管支炎	4
RSウイルス細気管支炎	8
RSウイルス肺炎	1
RSウイルス感染症	13
インフルエンザ	9
インフルエンザA型	1
クループ症候群	3
ヒトメタニューモウイルス気管支炎	1
マイコプラズマ気管支炎	2
マイコプラズマ肺炎	17
咽頭炎・扁桃炎	4
気管支炎	3
気管支肺炎	15
気管支喘息	4
気管支喘息重積発作	1
気管支喘息発作	11
急性気管炎	1
急性気管支炎	5
急性呼吸器感染症	1
急性喉頭気管炎	2
急性喉頭気管気管支炎	1
急性上気道炎	10
急性副鼻腔炎	1
鼻閉	2
肺炎	17
細菌性肺炎	7
上気道狭窄	1
喘息性気管支炎	15

血液・造血器・免疫疾患	
アレルギー性紫斑病	1
血球貪食症候群	2
血小板減少症	1
先天性赤芽球ろう	2
溶血性貧血	1

内分泌・代謝疾患	
SGA性低身長症	1
成長ホルモン分泌不全性低身長症	1
低身長症	2
糖尿病	2
アセトン血性嘔吐症	1

神経系・感覚器疾患	
意識障害	2
熱性痙攣	5
痙攣重積発作	1
左顔面神経麻痺	1
難聴	1

消化器系疾患	
胃軸捻症	1
肥厚性幽門狭窄症	1
結腸憩室炎	1
肝機能障害	1
急性化膿性歯髄炎	1
急性肝炎	1

皮膚・皮下組織疾患	
右頚部化膿性リンパ節炎	1
右側頬部膿瘍	1
頚部リンパ節炎	1
脂漏性乳児皮膚炎	1
多形紅斑	1

腎尿路生殖器系疾患	
尿路感染症	11

周産期関連性疾患	
赤血球増加症による新生児黄疸	11
新生児黄疸	4
新生児感染症	3
新生児血小板減少症	1
先天性サイトメガロウイルス感染症	1
早産児	1
無呼吸発作	2

損傷・中毒・アレルギー	
左手熱傷	1
低体温	1
熱中症	1
薬物性アナフィラキシー	1

紹介入院率
129/290＝44.5％